

NEW JAPAN  
PHILHARMONIC  
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団  
2026/2027シーズン



2026/2027 シーズン  
新日本フィルハーモニー交響楽団 6、7月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #40 相場ひろ	1
トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #671 石川亮子	7
マーラー：交響曲第3番 歌詞対訳	14
すみだクラシックへの扉 #41 小室敬幸	17
楽員ストーリーズ ⑤⑥ 清水 伶 (フルート)	23
NJP from Inside	26
2026 / 2027 シーズン 定期演奏会プログラム	28
NJP 9月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	31
室内楽シリーズ	32
音のアトリエ	33
お客様からの声	35
「パトロネージュ・システム」のご案内	38

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



6.5 [金] 6 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第40回  
2026年6月5日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール  
6月6日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

<ドイツ>

<指揮者によるプレトーク (開演約5分前~)>

●ブラームス (1833-97)  
Johannes Brahms

ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 77 \*  
Violin Concerto in D major, op. 77 \*

約40分

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio
- III. Allegro giocoso, ma non troppo vivace

—— 休憩20分 ——

交響曲第1番 八短調 op. 68  
Symphony No.1 in C minor, op. 68

約45分

- I. Un poco sostenuto – Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco allegretto e grazioso
- IV. Adagio – Allegro non troppo, ma con brio

[指揮] 佐渡 裕  
Yutaka Sado, Conductor

[ヴァイオリン] 三浦文彰 \*  
Fumiaki Miura, Violin \*

[コンサートマスター] 崔(チェ) 文洙  
Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞  
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会
- 後援：ドイツ連邦共和国大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

<コンサートの感想をお寄せください>

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。  
<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



演奏会アンケートは  
こちらから  
<https://www.njp.or.jp/qs>



ドイツ連邦共和国大使館  
東京



©Peter Rigaud c/o Shotview Artists

### 佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年プザンソン指揮者コンクール優勝。これまでパリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など、欧州の名門オーケストラに多数客演を重ねている。2025年6月までオーストリアを代表し110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督を10年間務め、その後同楽団名誉指揮者に就任した。国内では新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督などを務める。CD録音は多数あり、最新盤としてトーンクンストラ管弦楽団を指揮した23枚目のCD『マーラー：交響曲第8番』を2026年5月にリリース。著書に『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP文庫／新書）など。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）、外務大臣表彰（2025年）などの受賞歴がある。

オフィシャルファンサイト <http://yutaka-sado.meetsfan.jp>



©Masahiro Uto

### 三浦文彰 [ヴァイオリン] Fumiaki Miura, Violin

ハノーファー国際コンクールにおいて、史上最年少の16歳で優勝。2018年サントリーホールARKクラシックスのアーティストティック・リーダー、24年に宮崎国際音楽祭の音楽監督に就任。ロサンゼルス・フィル、マリインスキー劇場管、イスラエル・フィル、ベルリン・ドイツ響などと共演。共演した指揮者はドゥダメル、ゲルギエフ、ズーカーマン、ロウヴァリ、フルシャなど。ロイヤル・フィルのアーティスト・イン・レジデンスも務めた。国内では、大河ドラマ「真田丸」テーマ音楽を演奏したことやTBS「情熱大陸」への出演も大きな話題になった。24年、デビュー15周年を迎え、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会を行い絶賛を博した。25年にはフィルハーモニア管、バンベルク響と共演。近年は指揮活動にも取り組み、スペインのアリカンテ響、東京フィル、京響、広響、山響などを指揮して好評を博す。CDはエイベックスよりリリース。第20回出光音楽賞受賞。使用楽器は株式会社クリスコ（志村晶代表取締役）から貸与された1732年製ガールネリ・テル・ジェス「カストン」。

この解説をお読みななる方々は、ヨハネス・ブラームス(1833~97)について、どのようなイメージをお持ちだろうか。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の9曲の交響曲に匹敵する交響曲を書こうとして、20年もかけて交響曲第1番を書き上げた人、言いたいことははっきり言わずに逡巡し続ける人、晩年の作品を中心に、人生の秋をしみじみと歌い上げた人……。最近では、彼を応援したロベルト・シューマン(1810~56)の妻であったクララ(1819~96)を深く思慕し、一生独身で過ごした人という、どこまで真実なのか微妙なイメージに人気があるようだ。

ブラームスの名を聞いて筆者が持つ第1のイメージは「すべてのジャンルにわたって優れた作品を書いた万能選手」だ。彼は歌劇にこそ手を付けなかったものの、それ以外のほぼすべてのジャンルを手がけて、クオリティの高い作品を生み続けた。歌曲だけは遺した作品数と比して人気薄いけれども、合唱曲や声楽アンサンブル用の作品を加えた声楽曲という括りで言えば、多くの作品が演奏会のレパートリーとして現役と言える。加えて、ブラームスはあれだけ多くの楽曲を作りながら、駄作と言いつける曲が見当たらない。ベートーヴェンにあきらかに彼の個性にそぐわない機会音楽や、コンセプトが詰め切れないまま発表してしまった楽曲などがあることを考えると、ブラームスの作品には、中途半端な出来映えのものがない。これは歴史に名を残す作曲家たちの中にあっても特異なことだ。

この万能選手ぶりを支えていたのは、おそらくはたゆまぬ研鑽と、厳しい自己批判であったことだろう。ブラームスは膨大な草稿を書き出す一方で、意にそぐわないものはあっさりで見限り、原稿を破棄することを厭わなかった。交響曲第1番ハ短調が完成までに20年を要したのは、楽譜を破棄したり、ほかの編成へと転用したりして、そのたびにいちから書き始めていたからだ。また自ら出来映えを吟味するだけでなく、ほかの音楽家に意見を乞うこともあった。自身が良い作品を創造するという点について、彼は人並み外れて貪欲であった。

そして何よりすばらしいのは、余人の真似できないような刻苦勉励を積み重ねたブラームスの音楽が、そうした苦勞を微塵も感じさせることなく、自然に、豊かに息づいて私たちの心に響くことである。ブラームスが常に高い水準にある作品を書き続け、後世に愛される大作曲家になり得た所以は、そこにあると言っていいだろう。

## ■ ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 op. 77

親友の名手の  
助言を得て

ブラームスは自身唯一のヴァイオリン協奏曲を1878年に作曲した。彼自身が本格的に学んだのはピアノであり、独奏楽器としてのヴァイオリンの表現力や技巧の可能性について通じていたわけではない。彼のヴァイオリンへの関心と呼び覚ましたのは当時の名ヴァイオリニストたちで、特に親友であったヨーゼフ・ヨアヒム(1831~1907)の演奏は、彼の創作意欲を大いに刺激した。1878年に入ると彼はヴァイオリン協奏曲のためのスケッチをとり始め、同年夏には本格的に作曲を開始する。独奏パートの技術的な問題点についてヨアヒムと詳しい相談をしたり、また秋になると指揮者として各地への客演が重なったりと、作曲の筆は遅々として進まなかったものの、年末までには完成にこぎつけ、翌年1月1日、ライプツィヒのゲヴァントハウスにて、ヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮で初演された。この演奏会は大成功を収め、またその後ヨアヒムが各地でこの協奏曲を採り上げたこともあって、作品は短期間のうちに広く知られ、愛好されるようになった。なお、ヨアヒムはこの曲のためのカデンツァを作曲している。

曲の構成と  
音楽の特徴

### 第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo

序奏のないソナタ形式であり、冒頭で荘重な第1主題が管弦楽によって提示される。様々なエピソードを経て独奏ヴァイオリンが華麗に登場し、その後優美な第2主題は独奏によって提示される。展開部が静と動の間を劇的に行き来した後、短い再現部を経て独奏がカデンツァを奏し、雄渾な結尾を迎える。

### 第2楽章 アダージョ

3部形式からなり、第1部は牧歌風であり、中間部はより劇的で緊張感に満ちている。再び第1部に戻り、穏やかな気分のうちに終わる。

### 第3楽章 アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロppo・ヴィヴァーチェ

自由なロンド形式による。独奏ヴァイオリンの激しくも陽気な、ロマ風の主題で始められる。こうしたエキゾチックな要素の導入には、ヨアヒムが1853年に作曲したヴァイオリン協奏曲 二短調「ハンガリー風」(当時はロマ音楽を「ハンガリー風」と言っていた)の影響があるとも言われる。目覚ましい技巧を披露する独奏ヴァイオリンと共に、大きく高揚しながら全曲が締めくくられる。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

## ■ ブラームス：交響曲第1番 八短調 op. 68

20年を超える  
構想を経て

ブラームスは、青年期より交響曲を作曲するための構想をいくつか持っていたが、作曲にはたいへんに慎重であった。1854年、いちおうの完成を見た2台のピアノのためのソナタを交響曲に仕立て直そうと試みるが、この楽曲の草稿は、結局第1楽章がピアノ協奏曲第1番 二短調 op.15の第1楽章の骨子となるに終わった。58年に4楽章を書き上げた管弦楽曲は、全6楽章のセレナード第1番 二長調 op. 11として完成された。現在知られている限りでは、第1楽章が62年に、現在の序奏がないかたちでいったん完成していたという。しかしその後ブラームスは作曲を中断してしまい、再び採り上げるまでには12年を要した。

1874年、いよいよ本格的に交響曲に取り組み始めたブラームスは、翌年すべての楽章を書き上げる。さらなる改訂の上、初演は1876年11月4日にカールスルーエで行われ、大成功を収めた。

曲の構成と  
音楽の特徴

### 第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌート〜アレグロ

劇的な力感と共に始まる序奏は、この楽章の主要動機および全曲の基本動機ともいべき音形を含んでいる点が注目される。主部はソナタ形式による。

### 第2楽章 アンダンテ・ソステヌート

優美な緩徐楽章。草稿段階ではロンド形式であったものが、3部形式に短縮されている。

### 第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

スケルツォが来るべき位置でありながら、ロマンス風の優美な小品となっている。3部形式による。

### 第4楽章 アダージョ〜アレグロ・ノン・トロppo、マ・コン・プリオ

第1楽章同様に規模の大きい序奏は、やはり主部の動機のほぼすべてを提示する。アルペンホルンを思わせるホルンの朗々たる吹奏の後、堂々たる第1主題と共にソナタ形式の主部が開始される。この主題についてはベートーヴェンの交響曲第9番にあらわれる「歓喜の歌」の旋律との類似性がよく指摘されるが、ブラームス自身はその関連を明確に否定している。全曲はクライマックスで序奏のホルンの旋律などが回想されて、スケール大きく幕を閉じる。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

Triphony Hall Series  
Suntory Hall Series  
2026-2027 Season

#671

6.12 [金]  
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
サントリーホール・シリーズ 第671回定期演奏会  
2026年6月12日(金) 19時00分  
サントリーホール

6.13 [土]  
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
トリフォニーホール・シリーズ 第671回定期演奏会  
2026年6月13日(土) 14時00分  
すみだトリフォニーホール

<指揮者によるプレトーク (開演約5分前~)>

● マーラー (1860-1911)

交響曲第3番 二短調

Gustav Mahler: Symphony No. 3 in D minor

約100分

第1部 Erste Abteilung

I. 力強く、決然と Kräftig, Entschieden

第2部 Zweite Abteilung

II. テンポ・ディ・メヌエット。つとめて中くらいの速さで Tempo di Minuetto. Sehr mässig

III. 気楽に。スケルツァンド。急がずに Comodo. Scherzando. Ohne Hast

IV. きわめて遅く。神秘的に。一貫してpppで Sehr Langsam. Misterioso. Durchaus ppp

V. 快活なテンポかつ利発な表情で Lustig im Tempo und keck im Ausdruck

VI. 遅く。安らぎに満ちて。内に感じて Langsam. Ruhvoll. Empfundener

※本公演は休憩がありません。

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[アルト] 藤村実穂子

Mihoko Fujimura, Alto

[女声合唱] 晋友会合唱団 [合唱指揮] 清水敬一

Shin-yu Kai Choir, Female Chorus Keiichi Shimizu, Chorus Master

[児童合唱] 東京少年少女合唱隊 [合唱指揮] 長谷川久恵

The Little Singers of Tokyo, Children's Chorus Hisae Hasegawa, Chorus Master

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙、西江辰郎

Munsu Choi and Tatsuo Nishie, Concertmasters

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団) [6/13公演]

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

■後援：オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム東京

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは  
こちらから  
<https://www.njp.or.jp/qs>



Rohm Music  
Foundation  
ロームミュージックファンデーション

オーストリア文化フォーラム  
austrian cultural forum

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、  
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、  
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくなる。  
そのころざしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、  
KAJIMAはつくる。

豊島美術館

豊島特設サイト



100年をつくる会社  
in 鹿島



©Takashi Iijima

## 佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。これまでパリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など、欧州の名門オーケストラに多数客演を重ねている。2025年6月までオーストリアを代表し110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督を10年間務め、その後同楽団名誉指揮者に就任した。国内では新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督などを務める。CD録音は多数あり、最新盤としてトーンクンストラ管弦楽団を指揮した23枚目のCD『マーラー：交響曲第8番』を2026年5月にリリース。著書に『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP文庫／新書）など。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）、外務大臣表彰（2025年）などの受賞歴がある。オフィシャルファンサイト <http://yutaka-sado.meetsfan.jp>



©R&G Photography

## 藤村実穂子 [メゾ・ソプラノ] Mihoko Fujimura, Mezzo-soprano

ヨーロッパを拠点に活動する日本を代表するメゾ・ソプラノ歌手。日本人として初めてパイロイト音楽祭にデビューし、フリッカ、クンドリ、ブランゲーネ、ワルトラウテ、エルダの主役級で9年連続出演し高く評価された。ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、ロンドン・ロイヤル・オペラ・ハウス、ミュンヘン国立歌劇場、新国立劇場など、世界各地の主要歌劇場で活躍。ティーレマン、アバド、メータ、小澤征爾、エツェンバツハ、ハイティンク、シャイーら著名指揮者と共演し、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管など世界最高峰のオーケストラとも共演を重ねている。東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業後、同大学院およびミュンヘン音楽大学大学院を修了。出光音楽賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、エクソンモービル音楽賞、サントリー音楽賞、紫綬褒章などを受賞し、令和6年度文化功労者に選出された。

## 晋友会合唱団 [合唱] Shin-yu Kai Choir, Chorus

関屋晋を常任指揮者とした合唱団の集合体として活動を開始し、現在コーラスマスターは清水敬一が務め、オーケストラとの共演を主たる活動としている。1980年小澤征爾指揮・新日本フィルハーモニー交響楽団 マーラー：交響曲第8番「千人の交響曲」共演に際し、「晋友会合唱団」としてデビュー。その後も小澤・新日本フィルと共演を重ねるとともに、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管、ロンドン響、ボストン響ほかと、またラトル、マゼール、シノーポリ、ブーレーズ、メータ、インバル、佐渡裕ほか各氏と共演し絶賛を浴びている。レパートリーは古典派・ロマン派から現代作品まで幅広く、その活動は国内はもとより海外からも注目を浴びている。

## 清水敬一 [合唱指揮] Keiichi Shimizu, Chorus Master

1959年東京生まれ。1982年早稲田大学理工学部電気工学科卒業。指揮法を遠藤雅古、V. Feldbrill、合唱指揮を関屋晋の各氏に師事。現在およそ十数の合唱団の指揮を任される。各地で合唱とオーケストラのための作品のコーラスマスターを務め、初演した現代作品も多い。2005年に世界合唱シンポジウムに於いて講師を務める。国内外の音楽祭・作曲コンクール・合唱コンクールの審査員を歴任。著書に『合唱指揮者という生き方 私が見た「折々の美景」』（アルテスパブリッシング）。現在、JCDA日本合唱指揮者協会理事、東京藝術大学附属高等学校講師。

## 東京少年少女合唱隊 [児童合唱] The Little Singers of Tokyo, Children's Chorus

ヨーロッパの伝統音楽に基づく音楽教育を目的とする日本初の本格派合唱団として1951年設立。6歳から基礎を学び、演奏活動の中核を担う15歳から19歳のコンサートコアに加え、室内合唱のカンマーコアまで幅広い演奏活動を行う。グレゴリオ聖歌から現代作品までレパートリーは幅広く、同声から混声の合唱作品までをカバーする。松平頼暁、一柳慧、細川俊夫等への委嘱作品も多く手掛ける。年2回の定期公演の他、1964年の訪米以来海外公演は34回を数え、2024年にはドイツ各地で5公演を実施。国内外のオーケストラ、オペラ劇場との共演も多く、C. アバド、R. ムーティ、F. ルイーザらとも共演し高い評価を得た。2021年創立70周年では「70周年記念コンサートシリーズ2021-2023」全4公演を開催、最終公演をサントリーホールで実施。昨秋開催の「細川俊夫生誕70周年記念コンサート」では好評を博した。本年、創立75周年を迎えた。

## 長谷川久恵 [合唱指揮] Hisae Hasegawa, Chorus Master

東京少年少女合唱隊の芸術監督／常任指揮者。主催公演並びに海外公演を牽引する傍ら、国内外のオペラ・オーケストラの公演にてコーラスマスターを数多く歴任。混声合唱曲にも対応するグループ「コールスLSOT」や声楽アンサンブル「カンマーコア」を組織し、幅広い演奏活動を展開。国内外の合唱コンクールの審査員や合唱祭などで講師を務める。

古代ペルシアのゾロアスター教の開祖ツァラトゥストラ。その人物になぞらえてフリードリヒ・ニーチェは、「ツァラトゥストラはかく語りき」で「超人」や「永劫回帰」の哲学を語った。この著作から発想を得て1896年という同じ年に、R. シュトラウスは交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」を作曲し、マーラーは交響曲第3番を書き上げている。

「交響曲は世界のものでなくてはならない。それはすべてを含んでいなければならない」。この言葉は、マーラーの交響曲が自身の世界観に基づくことを端的に示している。実際、マーラーの交響曲には聖と俗、高尚なものや大衆的なものといった相反する要素が併存し、さらに器楽のみの交響曲と声楽を含む交響曲がほぼ半数ずつを占める。こうした特性が最も雄大なスケールで結実した第3番は、独唱と合唱を伴い、6楽章（当初の構想では7楽章）、演奏時間でおおよそ100分という、マーラーの交響曲のなかでも最大級を誇る。

■ マーラー：交響曲第3番 二短調 ※歌詞対訳は14～15ページをご覧ください

湖畔の作曲小屋にて ▶

グスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第3番は、このような大規模作品でありながら、作曲年としては1895～96年、具体的には1895年と1896年のふた夏で書き上げられた。その要因としては、合唱付き交響曲として、ベートーヴェンの「第九」を越える使命を担った第2番を完成させ、重圧から解放されたことが大きかったとされる。1895年秋には、オペラ歌手アンナ・フォン・ミルデンブルクと親密な関係になり、同年12月13日には交響曲第2番がベルリンで初演され成功を収めた。なかでも第3番の創作を後押ししたのは、オーストリアのザルツカンマーグート地方、アッター湖畔の町シュタインバッハに広がる美しい自然であったと考えられる。マーラーは1894年同地に作曲小屋を建て、そこで第3番の作曲に没頭した。ブルーノ・ワルターの回想によれば、1896年夏にワルターがマーラーを訪ねた際、その風景を前にマーラーは「何も見る必要はない。すでに私がすべてを音楽にしてしまったのだから」と語ったという。

予定されていた標題 ▶

交響曲第3番はベートーヴェンに倣い、いわばマーラーの「田園」と位置づけることもできるだろう。さらに「そのなかでは、自然そのものが声を持ち、おそらく夢のなかでしか理解できないような奥深い神秘を語るのです！」という言葉が示すように、マーラーが音楽にしようとしたのは目に見える自然を含め、その背後にある大きな力そのものであった。1896年8月6日、マーラーは音楽批評家マックス・マルシャルクへの手紙で、完成した作品の構成と標題を次のように記している。

「夏の真昼の夢」

第1部 — 「序奏・牧神は目覚める」

「第1楽章・夏が行進してくる（バックスの行進）」

第2部 — 「第2楽章・野の花たちが私に語ること」

「第3楽章・森の動物たちが私に語ること」

「第4楽章・人間が私に語ること」

「第5楽章・天使たちが私に語ること」

「第6楽章・愛が私に語ること」

1895年の時点では、第7楽章は「子供の魔法の角笛」による歌曲「天上の生活」を置いた「子どもが私に語ること」になる計画であったが、最終的には使われず、後に交響曲第4番の終楽章へと転用された。

神へと至る構想 ▶

これらの標題は、いつものようにマーラー自身によって作曲後まもなく撤回されている。しかしながらその配列に注目すれば、この交響曲がカオスという無機質の状態から出発し、鉱物、植物、動物、人間、天使という階梯をたどり、最後に愛、すなわち神へと至る構成を備えていることがわかる。これは世界存在の悠久なる上昇過程を描いたものであり、その背景には古代ギリシアの哲学者アリストテレスを土台として、中世の神学者トマス・アキナスによって体系化された階層的世界観があると言えるだろう。その理念はオーケストラの扱いにも反映されている。以下に各楽章について、標題と形式の関係にも触れながら、この壮大な世界観がどのように音楽として実現されているかを見ていこう。

第1部：第1楽章 ▶

最も長大な第1楽章は875小節に及び、それ自体で第1部を成している。様々な分析があるが、ここでは標題に従い、序奏付きソナタ形式として捉えてみたい。「序奏」は世界の目覚めを呼ぶように、8本のホルンがユニゾンで吹き鳴らすメロディーで始まる。その後も二短調でいくつもの主題が現れるなか、「牧神（パン）は眠る」（マーラーのスケッチによる）。牧神はギリシア神話の半獣神で自然の神であり、また「全て」を意味する「汎（パン）」と結び付けられてきた。

やがて牧神が目覚め、「夏が行進してくる（バックスの行進）」、すなわちへ長調の颯爽とした行進曲から提示部に入る。バックス（ギリシア神話ではディオニュソス）は酒と熱狂の神で、展開部においても、序奏のいくつかの主題に続いて再び行進曲となる。スケッチに「戦いが始まる」「南からの嵐」と記されているように、音楽は勢いを増しつつ、複数の行進曲の断片が次々と現れては重なり合う。再現部では「序奏」から順に主題が再び現れ、行進曲も再現されて、その流れのまま明るく弾けるように終わる。

続く第2楽章から第2部となる。第2楽章はメヌエット楽章で、2つのトリオをはさむ。メヌエットはきわめて典雅なロココ風のもので、マーラー自身が「ほっそりとした茎を持つ花々が風の中でそよぐよう」と語った通りである。一方、諧謔味を帯びたトリオでは、突然、「暴風が野を吹き抜け、花や葉たちを震えさせる」かのような気配が漂う。

第3楽章は、同じく2つのトリオを含むスケルツォ楽章。スケルツォは、「子供の魔法の角笛」による自作の歌曲「夏の交代」を引用して始まる。歌詞はカッコウからナイチンゲールへ、つまり春から初夏への季節の移ろい語る内容で、野性的でユーモラスなもうひとつの主題が続く。トリオでは、スコアに「はるか遠くからのように」と記されたポストホルンがのびやかに歌い（この旋律には、リストの「スペイン狂詩曲」後半との類似も指摘されている）、ノスタルジックな時間が立ち現れる。

第4楽章ではアルト独唱（本日はメゾ・ソプラノ）が、「ツァラトゥストラはかく語りき」第4部の一節「ツァラトゥストラの輪唱歌」を歌う。「お人間よ!」の呼びかけに始まる真夜中の世界は、チェロとコントラバスに現れる引き延ばされた5度の音や、スコアに「自然の音のように」と指示された夜の鳥の声によって、静かで神秘的な響きに包まれている。11行からなる詩には「深い tief」という語が8回登場し、「苦痛」と「悦び」がその深さのうちに響き合う。

第5楽章は静寂から一転して、「高いところに置かれた」鐘と児童合唱に女声合唱が加わり、潑刺とした歌声の世界となる。「子供の魔法の角笛」からのテキストは、ペトロの罪とイエスの赦しを主題とする。途中、イエスを三度知らないと否定したペトロの嘆きが独唱によって歌われるが、この旋律を含め、交響曲第4番を予示する楽想も現れる。

第6楽章は悠然と広がる緩徐楽章であり、2つの主題が交互に変奏される二重変奏として分析される。主要主題は二長調の平安に満ちた音楽で、前楽章では沈黙していたヴァイオリンによって提示される。嬰ハ短調による副次主題は朝露のような清らかさをたたえたもので、それらが変奏・展開されながら壮大な高みへと導かれていく。マーラーが「それは生命のない自然とともに始まり、神の愛まで高められていくのです!」（1896年7月、ミルデンブルクへの手紙）と語ったこの楽章によって、全曲は輝かしく深い感動のうちに閉じられる。

[編成]フルート4(ピッコロ4持替)、オーボエ4(イングリッシュホルン持替)、クラリネット3(バスクラリネット持替)、Es管クラリネット2、ファゴット4(コントラファゴット持替)、ホルン8、トランペット4、[バンド：ポストホルン]、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、大太鼓&シンバル、吊しシンバル、小太鼓、トライアングル、タンバリン、タムタム、ルーテ、グロックンシュピール、鐘、[バンド：小太鼓]、ハープ2、アルト独唱、女声合唱、児童合唱、弦楽5部。



# Passion for the Best

その情熱が、可能性をひらく。

限界を超えて、ベストをひたむきに追い求める。

大和証券グループは、挑み続ける情熱を失わない、すべての人を応援します。

大和証券グループ

## マーラー：交響曲第3番 ニ短調

Gustav Mahler: Symphony No. 3 in D minor

歌詞対訳：石川亮子

## IV O Mensch! Gib Acht!

Was spricht die tiefe Mitternacht?

„Ich schlief! Ich schlief!

Aus tiefem Traum bin ich erwacht!

Die Welt ist tief,

Und tiefer, als der Tag gedacht!

Tief ist ihr Weh!

Lust- tiefer noch als Herzeleid!

Weh spricht: Vergeh!

Doch alle Lust will Ewigkeit-,

-Will tiefe, tiefe Ewigkeit!“ (Friedrich Nietzsche)

## V Es sangen drei Engel einen süßen Gesang,

mit Freuden es selig in dem Himmel klang.

Sie jauchzten fröhlich auch dabei:

daß Petrus sei von Sünden frei!

Und als der Herr Jesus zu Tische saß,

mit seinen zwölf Jüngern das Abendmahl aß,

da sprach der Herr Jesus: „Was stehst du denn hier?

Wenn ich dich anseh', so weinst du mir!“

Und sollt' ich nicht weinen, du gütiger Gott,

ich hab' übertreten die zehn Gebot.

Ich gehe und weine ja bitterlich.

Ach komm und erbarme dich!

Ach komm und erbarme dich über mich!

„Hast du denn übertreten die zehen Gebot,

so fall' auf die Kniee und bete zu Gott!

Liebe nur Gott in alle Zeit!

So wirst du erlangen die himmlische Freud'!“

Die himmlische Freud' ist eine selige Stadt,

die himmlische Freud', die kein End' mehr hat!

die himmlische Freude war Petro bereit't

durch Jesum und Allen zur Seligkeit. (Des Knaben Wunderhorn)

## 第4楽章 おお人間よ！ 注意せよ！

深い真夜中は何を語るか？

「私は眠っていた！ 私は眠っていた！

深い夢から私は目覚めた！

この世は深い、

昼が考えた以上に、もっと深い！

深いのだ、この世の苦痛は！

悦びは — 心の苦悩よりも深い！

苦痛は語る、「去れ！」と。

だが、あらゆる悦びは永遠を欲する —、

— 深い、深い永遠を欲するのだ！」 (フリードリヒ・ニーチェ)

## 第5楽章 三人の天使はすてきな歌を歌っていた、

それは喜びとともに天国で至福に響いていた。

天使たちは楽しげに歓声をあげた、

ペトロが罪から解放された！

主イエスがテーブルに着いて、

十二人の弟子たちとともに晚餐をとった時、

主イエスは言った。「なぜお前はそこに立っているのか？

よく見れば、お前は泣いているではないか！」

どうして私が泣かないでいられるでしょうか、慈悲深い神よ、

私は十戒に背いてしまいました。

だから私は行って激しく泣くのです。

ああ、来て憐んでください！

ああ、来て私を憐れんでください！

「もしお前が十戒に背いたとしたら、

ひざまずいて神に祈りなさい！

いかなる時も神のみを愛しなさい！

そうすればお前は天上の喜びを得るだろう！」

天上の喜びは至福の都、

天上の喜び、それはもはや終わりが無い！

天上の喜びがペトロに授けられた

イエスによって、すべての人に至福へと。 (『子供の魔法の角笛』)

SUMIDA  
TOBIRA of classic  
2026-2027 Season  
#41

7.3 [金] 4 [土]  
すみだクラシックへの扉

〈日本〉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第41回  
2026年7月3日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール  
7月4日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●芥川也寸志 (1925-89)

交響管絃楽のための前奏曲

Yasushi Akutagawa: Préludes pour Orchestre Symphonique

約20分

●伊福部 昭 (1914-2006)

ヴァイオリンと管絃楽のための協奏風狂詩曲 (ヴァイオリン協奏曲第1番) \*

Akira Ifukube: Rapsodia Concertante per Violino ed Orchestra \*

約20分

I. Adagio - Allegro

II. Vivace spirituosu

—— 休憩20分 ——

●吉松 隆 (1953- )

交響曲第3番 op. 75

Takashi Yoshimatsu: Symphony No. 3, op. 75

約45分

I. Allegro

II. Scherzo

III. Adagio

IV. Finale

[指揮] 藤岡幸夫

Sachio Fujioka, Conductor

[ヴァイオリン] 木嶋真優 \*

Mayu Kishima, Violin \*

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

演奏会アンケートは  
こちらから  
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団  
■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)  
■特別協賛：オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団  
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

## Profile



©Shin Yamagishi

### 藤岡幸夫 [指揮] Sachio Fujioka, Conductor

日本指揮者界の重鎮であった渡邊暁雄最後の愛弟子、サー・ゲオルグ・ショルティのアシスタントを務めた。

英国王立ノーザン音楽大学指揮科卒業。1992年最も才能あるEU加盟国の若手指揮者に贈られるサー・チャールズ・グローヴス記念奨学賞を特例で受賞。1994年ロンドン「プロムス」にBBCフィルを指揮してデビュー以降数多くの海外オーケストラに客演。首席指揮者として毎年40公演以上を共演し2026年が27年目のシーズンとなる関西フィルは、25年4月から総監督としても楽団を牽引する。首席客演指揮者を務める東京シティ・フィルとの特徴ある活動は毎回大きな注目を集め、26年4月からは中部フィル芸術顧問としても新たな道を歩む。

シャンドスからBBCフィルとのCD8枚、ALM RECORDSから関西フィルとのシベリウス交響曲全集をリリース。著書に『音楽は好きですか?』三部作。

指揮・司会として関西フィルと共に出演中のBSテレ東『エンター・ザ・ミュージック』（毎週土曜朝8:30・BSテレ東公式YouTubeでアーカイブを配信中）は2025年10月で12年目、放送600回に迫る人気番組。

2002年渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。

公式ファンサイト <http://www.fujioka-sachio.com/>



©Kazumi Kurigami

### 木嶋真優 [ヴァイオリン] Mayu Kishima, Violin

2000年第8回ヴェニヤフスキ国際ヴァイオリン・コンクール・ジュニア部門にて日本人として最年少で最高位を受賞。11年ケルン国際音楽コンクールのヴァイオリン部門で優勝、あわせてDavid Garrett賞も受賞。16年に第1回上海アイザック・スターン国際ヴァイオリン・コンクール優勝。これまでに欧米豪、アジア、日本のオーケストラやデュオ、プレトニョフなど世界で活躍する指揮者と共演を重ね、高く評価されている。12年春にはケルン音楽大学を首席で卒業。15年秋には同大学院を満場一致の首席で卒業し、ドイツの国家演奏家資格を取得。16年秋には神戸市文化奨励賞を授与された。最新CDは2024年8月キングレコードより「Dear」をリリース。リサイタル、オーケストラとの共演、室内楽など幅広い活動のほかメディアへの露出も多い。使用楽器は、宗次コレクションより特別に賞与されたAntonio Stradivari 1699 "Walner"。

## Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

東京藝術大学音楽学部の前身となった東京音楽学校の本科に作曲部が設置されたのは1931年のこと。それまでは大学院に相当する研究科でしか、作曲を専攻することが出来なかったのだ。1933年になるとヨーロッパとアメリカで最新の西洋芸術音楽を学んできた橋本國彦が教授に就任。ところが第二次世界大戦後に東京音楽学校の改革が行われるさなか、橋本は戦中体制の責任者のひとりとして罷免されてしまう。その代わりに作曲科の教員として呼ばれたのが、高浜虚子の次男でパリ帰りの池内友次郎（1906~91）と、伊福部昭（1914~2006）である。この2人の系譜から、戦後日本の優れた作曲家たちが輩出されていったのだ。

### ■ 芥川也寸志：交響管絃楽のための前奏曲

芥川也寸志（1925~89）は芥川龍之介（1892~1927）の三男として生まれたが、2歳の時に父はこの世を去っている。龍之介が遺したストラヴィンスキーのSPレコードを好んだことで、15歳の頃に音楽を志した。通っていた東京高等師範学校附属中学校（現 筑波大学附属高等学校）の先生から紹介された橋本國彦に師事し、東京音楽学校に入学した。

演奏されなかった ▶  
卒業作品

1946年9月に伊福部昭が東京音楽学校にやってくると、芥川はその授業に衝撃を受ける。こうして伊福部から急激に影響を受けた「交響管絃楽のための前奏曲」（1947）を卒業作品として提出したのだった。残念ながら芥川の生前は演奏されることなく、1990年1月20日、山田一雄指揮の新交響楽団（芥川が亡くなるまで音楽監督を務めたアマチュア・オーケストラ）によって初演された。

曲の構成と ▶  
音楽の特徴

2部構成になっており、それぞれが大きな三部形式（A-B-A'）になっている。遅いテンポ（Largo）ではじまる第1部は伊福部的な“夜の音楽”に感化された主部（A）のあいだに、ジャポニスムのような海外からみた東洋風の間部（B）が挟み込まれる。第2部は快活な主部（A）のあいだに、中間部（B）として落ち着いたアンダンテが挟み込まれる。この楽想はコーダにも短く登場する。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハーブ、ピアノ、弦楽5部。

### ■ 伊福部 昭： ヴァイオリンと管絃楽のための協奏風狂詩曲（ヴァイオリン協奏曲第1番）

北海道での ▶  
原体験をもとに

伊福部昭が生まれたのは、現在の鳥取県東部にあたる因幡国で栄えた古代豪族を先祖にもち、祖父の代までは神社の神職を務めていた名家だった。

父の代で北海道に移り住み、伊福部自身は釧路で誕生。父が村長を務めることになって引っ越した音更村では、アイヌ文化に触れ、伊福部の原体験のひとつとなった。中学生の頃に札幌へ引っ越し、レコードを通してストラヴィンスキーをはじめとする最新の西洋音楽に魅せられる。2人の兄や友人たちと楽器を独習しながら、作曲も独学しはじめた。北海道帝国大学の管絃楽部ではコンサートマスターを務めた。

ヨーロッパでの  
評価を得て

大学の農学部を卒業する1935年に初の管絃楽曲「日本狂詩曲」を作曲し、日本人の優れたオーケストラ作品を求めて開催されたチェレブニン賞で第1位を獲得。それまで無名に等しかった伊福部の名を、東京の楽壇にまで轟かせた。その後は大編成に限れば、ピアノと管絃楽のための「協奏風交響曲」(1941)、「交響譚詩」(1943)、管絃楽のための音詩「寒帯林」(1944)が続き、戦後になってから伊福部が最初に書いた管絃楽曲が、このヴァイオリンと管絃楽のための「協奏風狂詩曲」(1948/51/71)である。初演時は全2楽章で「ヴァイオリンと管絃楽のための協奏曲」というタイトルだったが、2度の改訂(1951/71)を経て全2楽章で現在の曲名となった。

曲の構成と  
音楽の特徴

**第1楽章**は緩一急一緩の三部形式(A-B-A')で、コーダとして短く急(B')が回帰するという構成。最初のAは独奏ヴァイオリンのカデンツァ風にはじまり、旋律の一部はBにも登場。またBの途中では「ゴジラ」(1954)の旋律も顔を出す(ただし本作以前からこの旋律は使われている)。**第2楽章**は、変則的な三部形式。ティンパニを軸とした短い序奏のあと、リズムックな主部(A)が始まる。ハープとクラリネットの上で独奏ヴァイオリンが少し息の長い旋律を弾き出すと中間部(B)に。展開部の役割を担うカデンツァのあと、主部(A')の中心的な要素だけが再現される。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、小太鼓、トムトム、コンガ、ハープ、弦楽5部。

### ■ 吉松 隆：交響曲第3番 op. 75

現在の渋谷区代々木に生まれた吉松隆(1953~)は、幼い頃からクラシック音楽が身近にある環境だったが、最初に好んだのはロックやポップスだった。次いで14歳の頃からベートーヴェンやチャイコフスキーの交響曲を聴くようになり、突如として交響曲作家を志す。慶應義塾大学工学部に入学してからは作曲コンクールに応募しはじめると共に、伊福部と池内の弟子

である松村禎三と池内門下の川井學のもとで短期間だけ学んでいる。

CHANDOSシリーズの  
一環として録音初演

1974年、21歳で大学を中退してからはバンドをしながら、作曲コンクールへの応募を繰り返していた。出世作となったのは1981年に初演された「朱鷺によせる哀歌」で、現代音楽の主流に反旗を翻して調性とメロディの復活を主張。独自の立ち位置を築く。1998年に完成した本作は、英国の音楽レーベルCHANDOS(シャンドス)で1995年から始まった吉松作品の録音の一環として、交響曲が録音初演できることとなり作曲された。擬古典的な全4楽章で構成され、作品は初演も務めた指揮者の藤岡幸夫に献呈されている。

曲の構成と  
音楽の特徴

**第1楽章**「アレグロ」は、自由なソナタ形式。冒頭の不協和音に続いてオーボエが奏でる素朴な主題が、その後に登場する多くの旋律の原型となる。テンポが上がった主部で繰り返される激しい第1主題もそのひとつ。ピアノとヴィブラフォンが主導する第2主題を経て、第1主題と序奏主題が絡み合いながらピークを迎え、序奏の雰囲気に戻ってくると展開部に。再びテンポが速くなる再現部と、徐々にテンポが落ちていく終結部を経て、最後は序奏主題と第1主題が断片的に回想される。

**第2楽章**「スケルツォ」は短い序奏の後、チェロが伴奏音形を奏するところから主部となる。第1楽章に登場したリズムや旋律に変奏を加えて投入し、新しいメロディとリズムを生み出してゆく。

**第3楽章**「アダージョ」は2部構成。第1部は三部形式で、主部は第1楽章冒頭の不協和音とチェロのレチタティーヴォが交代してゆき、中間部は旋法的なトーンクラスターの後、徐々に第1楽章の序奏主題などの旋律が重ねられていく。静かに5拍子のリズムが刻まれはじめると第2部で、悲しげな旋律が繰り返されながら盛り上がる。

**第4楽章**「フィナーレ」も2部構成。第1部は、弦楽器が第3楽章終わりのメロディを簡素にした音形を、木管楽器が第1楽章の序奏主題を奏でるところからはじまる。そして第1~3楽章の要素を展開部のように自由に再構築しながら振り返ってゆく。チェロの低音の上で、木管楽器が明るい雅歌を歌いはじめると第2部に。第3楽章後半の悲しげな旋律も輝かしい姿に変わり、5拍子の力強いリズムによって祝祭に聴衆を巻き込んでゆく。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、タムタム、吊しシンバル、タンバリン、トムトム、トライアングル、シンバル、カバサ、カウベル、コンガ、ギロ、アゴゴ、ウッドブロック、ハイハット、ゴング、シストラム、ウッドチャイム、ヴィブラフォン、マリリンバ、チャイム、ピアノ(チェレスタ)、弦楽5部。